

趣旨説明：『教養としての世界史の学び方』へのコメントをかねて

著者	松方 冬子
雑誌名	Humanities Center Booklet
巻	4
ページ	1-4
発行年	2020-07-10
URL	http://doi.org/10.15083/00079400

1

趣旨説明

——『教養としての世界史の学び方』へのコメントをかねて

松方 冬子



はじめに、このセミナーが開かれることになった経緯をご説明させていただきます。

2019年、山下範久編『教養としての世界史の学び方』(東洋経済新報社)、ならびに松方冬子編『国書がむすぶ外交』(東京大学出版

会) という2冊の書が出版されました。前者は社会科学を軸とした歴史の教科書、後者は人文学の論文集という違いがありますが、どちらも西洋中心主義から世界史を解放するべく、時系列史に疑問を呈しつつ「空間把握」や「19世紀言語」という切り口で世界史を考え直そうとしているところに共通点があると私は考えております。

そこで本日は『教養としての世界史の学び方』の編著者である山下範久さん(立命館大学)、同書に寄稿され、西洋中心の世界史を批判された岡本隆司さん(京都府立大学)、同じく寄稿者として「戦争」と「外交」という言葉について分析を加えられた廣野美和さん(立命館大学)をお迎えし、2冊の本を相互に批評しあい、応答しあうことによって、社会科学と歴史学の問題意識や方法論の違いと協働の可能性を語れたらと思ひ、セミナーとして開催させていただいた次第です。「大きな枠組みだが不正確⇔精緻だが全体像が見えない」といったありがちな比較ではなく、それぞれの学問が

「何を根拠に何を指すのか」という部分に踏み込むような議論を目指したいと考えています。

『教養としての世界史の学び方』書評

——共通する出発点と、西洋中心主義への違和感

手始めにご紹介するのは、2019年6月に長崎で行った『教養としての世界史の学び方』の読書会¹での私のコメントです。

本書は、現代人がいま「世界史」あるいは「歴史」に何を求めているのかを正面から捉えようとしている好著だと私は思いました。「歴史」というと、古いほうから新しいほうへ、すなわち古代→中世→近世→近代へと変化していくものと捉えるのが一般的ですが、本書ではそうした捉え方ではなく、21世紀の現在の社会を、あるいは価値観を何が支えているのか、あるいはなぜこうなっているのかということから歴史を捉え、その問いに答えようとしている非常に野心的な本だと思います。

本書の構成は3部建てで、第1部は「私たちにとっての世界史はいかに書かれてきたか」、第2部は「世界史と空間的想像力の問題」、第3部が「社会科学の基本概念を歴史化する」となっています。第1部では今の世界史あるいは歴史に対する疑問や批判を扱い、第2部では主に空間把握について、たとえば、東南アジアという概念、アメリカという概念、あるいはイスラム世界という概念を考え直す議論がなされています。そして第3部では、市場、市民社会、国家、戦争、外交、家族、文学、宗教という言葉捉え直されています。

この章建てを見たとき、私は、非常に僭越ながら「私が『国書がむすぶ外交』で目指したことと同じだ!」と思いました。『国書がむすぶ外交』では、「空間把握」と、「外交」や「国家」といった、いわゆる「19世紀言語」をもう一回見直してみようとしています。今の歴史学に対する批判という点におい

1 この読書会に関しては、松方冬子のウェブサイト (<https://www.hi.u-tokyo.ac.jp/personal/fuyuko/kaken/nagasakikuchi.html>) でも紹介されている。

て、非常に共通するものがあると思ったのです。

ただ出発点はきわめて近いけれども、発展の方向性は全然違っている。『国書がむすぶ外交』の執筆者は事例研究を旨とする実証史家の集まりなので、ひたすら細かい事例へ、それを支える史料へ、と分け入っていくのですが、それに対して、『教養としての世界史の学び方』は全然違うアプローチで問題に取り組もうとしている。そのことが実に新鮮に感じられました。

一方、あえて、本書に対して物足りなさを感じた点を、『国書がむすぶ外交』に参加した日本史、東洋史、西洋史の研究者を含む実証主義史家の視点から言わせていただくなら、『教養としての世界史の学び方』で踏まえている研究史がほとんど欧米のもの—洋書、あるいは翻訳書—である、ということです。そのようなアプローチで、同書で目指している「西洋中心主義の克服」が本当に実現できるのだろうか？ という疑問を抱きました。

また長崎での読書会では、19世紀言語を語る際、たとえば、原書の diplomacy を日本語で“外交”と訳したときの両者の語の意味のずれなど、それぞれの言葉が背負う歴史を考慮しないと議論として不十分ではないか、という指摘もさせていただきました。この「19世紀言語と翻訳」の問題はおそらく、学際的研究の余地が非常に大きい分野ではないかと思います。

この問題は本日おいでいただいている岡本さんも以前からご指摘されていることでもあり、読書会で私が出した「学際的研究」というキーワードから、歴史学の岡本さんが国際関係を専門とする山下さんにつないでくださり、人文学と社会科学が対話するこのセミナーが実現しました。テーマは、山下さんが事前の打ち合わせで的確にまとめてくださったとおり、「歴史学と社会科学の問題意識や方法論の違いと協働の可能性について語る」です。

あらためまして、本日は、『教養としての世界史の学び方』の寄稿者であり中国史研究を専門とする岡本隆司さん、同じく同書の著者であり、現代中国研究をご専門とされている国際関係学の廣野美和さん、そして同書の編者である国際関係学の山下範久さんにお越しいただいています。

お三方には、先ほどの私の拙劣な書評にご反論いただき、『国書がむすぶ

外交』についてコメントをしていただければと思います。それに対して私が
リプライをした後、総合討論とさせていただきます。

一方的な書評はよくありますが、こうして批評と反論で円環を描く機会
はなかなかないものと思います。本当にぜひいたくな機会を設けることができ、
ご協力くださった皆様に感謝しております。

では、岡本さん、廣野さん、山下さんの順でお話してください。